



洋書輸入協会会報

Vol. 29 No. 2 (通巻333号) 1995年2月

新年懇親会

1995年(平成7年)のJBIA 賀詞交換会は、1月6日(金)午後6時から新宿ホテルセンチュリー・ハイアット桃山の間で開かれた。参加78社218名で、招待3名を加えると221名の出席者で、昨年より3社17名の減は、それぞれの理由があつてのものと考えたい。

最近、ある事で、JBIAの記録を調べる必要に迫られて「洋書輸入協会報」を指に唾して繰ってみたが意外なことに、大事な事や重要な事、そういうものが、時々抜けていることがわかった。だから、面白からうが面白くなからうが記録はきちんと残すべきだと思った。そういう意味で今回は、出来るだけ発言された方とその内容を忠実に伝えたいと考える。

司会進行役は、OECD 東京広報センターの水谷氏が努めた。文化厚生委員会は、各委員に各々の役割分担を決めて、新年会の運行に当たっている。ここ2年は、鶴氏(東亜ブック)の軽妙な司会であったが、一味違う司会者であった。水谷氏の「アテンション・ブリーズ」から会が始まった。水谷氏の前置きの言は次の通り。

「価格破壊・規制緩和・猛暑など〔スッタモンダ〕がありました(いぬ年)も、新横綱貴乃花の誕生でめでたく幕になり、いよいよ本格的な景気回復に期待を込めた猪年を迎えることになりました。新年の門出に際し、活気にみちた明るく楽しい新年会とさせていただきますたく皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。」

次いで、会を主催する文化厚生委員会委員長の吉本氏(紀伊國屋書店・専務)より、新年会開催の辞が述べられた。新年の挨拶と多数の参加に対する謝意のあとで一言次のように述べられた。

「本年も多事多難が予想されます。最も特徴的なことは、昨今のメディアの変化に加えて、情報通信の革新によるグローバルな物流構造の変化に我が業界が直面していることです。見るのは辛いけれどもこれを直視して将来への対応をお互いに考えなければならない時期が、将来に、来ています。時代の流れについての総論は皆一致されましようが、各論については、意見は分かれるのでしよう。どうぞ時間の許すかぎり懇談して意見の疎通をはかって、この新年会を意義あるものとして頂きたいと思ひます。」

次いで、恒例により、海老原理事長(丸善・会長)より、ご挨拶を頂いた。その内容は、前号「洋書輸入協会会報」に全文掲載されているのでご熟読頂きたい。ただし、ご挨拶の前のアドリブが書かれていないので、再現すると「今日の主催者の吉本さんも司会の水谷さんも、人集めの名人の鶴さんも、福々しくツヤがあつて、どこに業界の不況があるのかという感じが致します。」

続いて、松原氏(紀伊國屋書店・社長)より、ご挨拶と乾杯の音頭を頂いた。ご挨拶の内容の要点は次の通り。

新年懇親会	1	文化厚生委員会だより	3	洋書輸入協会史(5)	5
理事会報告	3	うちの会社	4	東京の坂と橋と文明開化(54)	7
海外ニュース	3	「会報」広告掲載料ご案内	4	広 告	8

「皆様とともに本年は、平和で、天変地異、人災がなく
平穏な干支にあやかり飛躍の年であることを祈りたい。
昨年、国際的に経済は安定・成長したが、ひとり日本
においては政局の安定を欠き、施策みるべきものがなく
その上バブル崩壊の善後策が遅れ不況よりの脱出の実感
なく、国際的にも遅れをとりました。

洋書業界の内外価格差に触れられて

人間は考えることによってのみ進歩してきたわけで
し、創意なくして飛躍的な発展はあり得ません。また危
険のないところにおおきな利益はないわけで、激しい競
争、淘汰のないところに進歩はないわけです。企業努力
が評価されないような業界は衰退していきます。これは
多くの歴史が証明しているところです。逆に社会的な能
率を維持し向上していくことは、出版業界をはじめ、あ
らゆる業界に妥当することと思われます。特に出版業界
は飛躍的に社会的能率を高めることなくして輝かしい新
しい世紀を迎えることは不可能であります。

和書業界の再販制見直しに触れられて

本は多品種少量の典型的な商品です。これを仕入れ
ることは緻密な頭脳、克明な資質、非常な勤勉さを要し、
他業界に比し優るとも劣るものではありませんし、読書
により鍛練した総合的判断力、批判的思考力をもってす
れば新世紀に向けて本以外のマルチメディア商品を大き

く取り入れて複合化し、他業界よりの乱入に対抗して充
分に戦え、発展できることを確信します。」

乾杯の後、昨年から始めた“鏡割り”が、洋販・渡辺
会長の音頭で行われた。壇上で一緒に木槌を振るわれた
のは、メクレンブルグ商会・鈴木社長、ゲーテ書房・村
山常務、内外交易・山懸社長、UPS・斉藤社長の4名
の方と年男の方数名だった。渡辺会長からは、「会社で
元気で働けることが何よりである。」旨のスピーチを頂
いた。

以後は、懇談・歓談の場となったが、それぞれの年頭
の計画を胸に、それぞれの相手と話をされていたよう
であるが、個々の話については記録の対象とはしない。

筆者の味覚では、樽酒とおすしがうまかった。

そろそろ帰りかける方も出る7時半過ぎ、中締めとし
て、水上氏（マイブック社長）が登場され、一言挨拶の
上、手締めを行った。ご挨拶の趣旨は次の通り。本当は
前置きが素晴らしい文であるが割愛する。

「いまは価格破壊が洋書業界にも押し寄せようとして
います。しかし、われわれ業界には、値段だけで征服さ
れない歴史と“なにか”があるはず。われわれはも
っと存在の理由を主張したいと私は思います。」

（記）文化厚生委員会・尼子（紀伊國屋書店）

1995年 洋書輸入協



海老原理事長

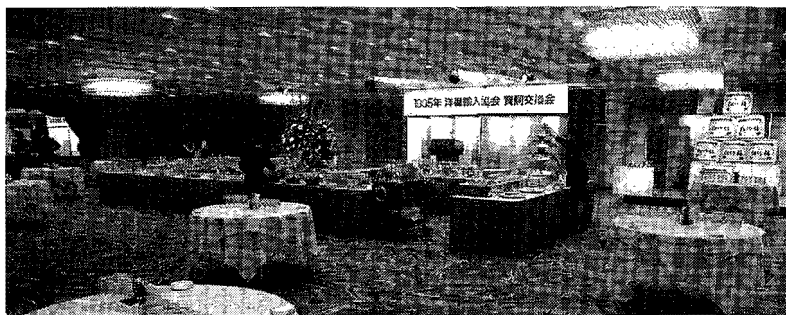


今年の演出

（写真、会報委員会提供）



今年もようこそ…



（写真、会報委員会提供）

理事会報告

(一) 11月、12月分収支報告

1月19日(木)開催の総務委員会で審議の総務委員長報告を承認した。

(二) 委員会報告

イ. 総務委員会

来期の会費値上げについて、数回の討議を重ねたが、下記を当委員会案とする。

a. 来期の値上げは時節柄極力低く抑えることで
特別の行事は含まず通常の運営費プラス自然増程度
で3年間の維持を目標とする。

b. 特別会計の取り崩しは行わない。

c. 具体的値上げ金額は前回程度とする。

ロ. 事業委員会

東京国際ブックフェア'95の参加社は国内151、海外45の合計196社、入場者は30,000人(昨年26,000)を目標とする。なお、同時開催の洋書バーゲンセールの参加社は10社で約1万冊が展示即売される。

ハ. 会報委員会

会報への有料広告掲載は会員外でも希望があれば受け付けたい。

来期より会報の印刷2色刷を具体化したい。

海外ニュース

戦後50周年をむかえたドイツの話題の読書番組

ドイツの主要テレビ局の一つである第2ドイツテレビ放送(ZDF)が昨年秋から放映しているシリーズ、「戦後のドイツ文学一人と書物」(Deutsche Literatur seit 1945-Nachrichten von Büchern und Menschen)が大変な人気を集めている。この番組はZDFとドイツ読書推進協会の協同制作によるもの。

戦後50年にあたる今年は、第7回一ベルリンの壁崩壊からドイツ統一まで一以降が放送されるほか、これまでの6回分も再放送され、さらにこの番組をもとにした6時間もののドキュメントのビデオや別売りの本(おおよそ110マルク)も刊行されている。

この番組は、そもそも戦後のドイツ語文学を体系的にとらえた初めてのAVドキュメントで、ドイツ文学だけではなく、スイスとオーストラリア文学も対象となっている。

1993年10月に第1回が放送されて以来、一般の視聴者からの反響は制作側の予想をはるかにこえるもので、国の内外の教育機関からもカセット版の発売を望む声があった。このように好評を得た番組であるが、これはドイツ読書推進協会とZDF、および映画製作会社、出版社、図書館、資料所有者等多数の積極的な協力がなくては実現しえなかったものである。

—Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel

1995年1月6日号より—

文化厚生委員会だより

麻雀同好会

(1) 第29回大会結果報告(平成6年3月16日)(凱旋門)

下記の通り、友隣社の中平社長がコンスタントな成績で見事に初優勝を飾られた。後日、中平社長より「古希自祝の日としてうれしいことでした」というお言葉と共にご自著「出版平凡録」を参加者の方に差し上げて頂きたいとのご依頼があった。

当件については、私のミスで、協会報への報告がされておらず、中平さんには誠に申し訳ないことをしました。こどもと謹んでお詫び申し上げます。

(記)

優 勝	中平(友隣社)+81
準優勝	原(紀伊國屋)+79
3 位	斉藤(三洋出版)+65

(2) 30回記念大会

3月中旬に行いますので宜しくお願い致します。30回記念となりますので、過去の優勝者の方の中で最高得点を取られた方をグランドチャンピオンとして特別表彰致しますので、奮ってご参加ください。

<JBIA 麻雀大会優勝者一覧> (敬称略)							
第1回	1971年9月11日	アイウエオ会館	原田(洋 販)	16	1986年11月14日	"	稲垣(内 外 交 易)
2	1974年10月26日	新世界サロン	福島(極 東)	17	1987年3月27日	"	和田(大 洋 交 易)
3	1977年3月26日	アイウエオ会館	今泉(ユ サ コ)	18	1987年12月4日	"	橋爪(丸 善)
4	1978年3月25日	"	吉開(I L S)	19	1988年4月1日	"	角井(丸 善)
5	1979年6月23日	"	鶴(東 亜)	20	1988年12月9日	"	鶴(東 亜)
6	1980年3月15日	"	市川(B F J)	21	1989年7月14日	"	武田(三 洋 出 版)
7	1981年3月20日	新世界菜館	鈴木(I L S)	22	1989年12月1日	"	原(紀 伊 國 屋)
8	1982年3月26日	アイウエオ会館	青木(I L S)	23	1990年7月13日	"	原(紀 伊 國 屋)
9	1983年3月11日	"	大野(C F B)	24	1991年1月18日	"	白井(東 亜)
10	1983年11月11日	桑 の 実	稲垣(内 外 交 易)	25	1991年10月25日	凱 旋 門	和田(大 洋 交 易)
11	1984年3月6日	"	小林(マグロウヒル)	26	1992年3月27日	"	鶴(東 亜)
12	1984年10月12日	ポ ニ ー	金木(原 書 房)	27	1993年1月22日	"	湊(紀 伊 國 屋)
13	1985年3月29日	"	鈴木(I L S)	28	1993年12月8日	"	白井(東 亜)
14	1985年11月15日	"	金木(原 書 房)	29	1994年3月16日	"	中平(友 隣 社)
15	1986年4月4日	"	柴山(兄)(洋 販)	(紀伊國屋書店 尼子記)			

うちの会社

(株) 神 田 教 文 館

「宗教・哲学・思想・古典の洋書輸入専門の神田教文館はこのほど“聖書神学研究文献目録”を刊行し、研究者から注目されている。これはA5判 千五百ページを越す大冊で、聖書神学の研究文献目録としては前例を見ないほど充実したもの。日本の洋書業界としても珍しいものだという。この本の掲載点数は約二万二千五百点にのぼり、この分野で入手可能な文献はほとんど網羅されている。内訳は、辞典類約一千点、聖書神学約一万四千点、神学(歴史・組織・実践神学を含め)約三千点、古代オリエント関係約千五百点、古代ギリシア・ローマ関係約三千点で、言語は主として英語・ドイツ語・フランス語・出版国はイギリス、アメリカ、ドイツ、フランスを中心に十一ヶ国にわたっている……」この記事はキリスト新聞1979年11月3日

号に掲載された書評である。現在でもこの文献目録は主要大学の研究室の書架に収められ、利用されている。又某大学図書館ではこの目録を永久保存にしている。そして又、当時この目録を手にした海外の専門出版社は「世界に類のないすばらしい目録である」との讃辞を呈している。このような目録を作成出来たと云うことは、それなりの長い経験と知識を必要とすることは云うまでもない。そして当社は「常に真理のメッセンジャー」たらんことを志して研究者に接し、日夜努力して月刊型録を発行し続けている。神田教文館は教文館を退社した有志によって、全く別法人の会社として、1971年10月に設立され、今日に及んでいる。

(後藤郁郎)

洋書輸入協会会報・広告掲載料等のご案内

- | | |
|--|--|
| <p>(1) 広告掲載料</p> <p>全 頁(表紙④)(max. タテ20cm×15cm) 15,000円</p> <p>2分の1頁(記事中)(max. タテ10cm×15cm) 8,000円</p> <p>3分の1頁(記事中)(max. タテ7cm×15cm) 5,000円</p> <p>4分の1頁(記事中)(max. タテ5cm×15cm) 3,000円</p> <p>(完全版下の原稿を送付のこと)</p> | <p>(2) 総代理店案内 1行(25字)あたり 300円</p> <p>(3) その他有料扱い</p> <p>上記以外のもので、その内容が宣伝・広告の要素が強い記事については、寄稿者と相談のうえ有料扱いとすることがあります。料金はおおむね上記に準じます。ご不明の点は事務局にお問合わせください。</p> |
|--|--|

謹んで震災のお見舞いを申し上げます。

今回の大地震によりお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被害を受けられた方々に謹んでお見舞いを申し上げます。一日も早い復興を哀心よりお祈りします。

洋書輸入協会
理 事 会
会報委員会

洋書輸入協会史 (95)

洋書輸入協会顧問 相良 廣 明

108 「外国雑誌予約取扱い業務の特異性について」の小冊子の作製

108.1 外国雑誌需要の増大

洋書の輸入業にとって、洋書輸入業務が再開された昭和24(1949)年、民間貿易が再開された昭和25(1950)年、というような節目毎に少しずつ輸入量が増大してきたが、外国雑誌の輸入量が急速に増大したのは、昭和33(1958)年下期から36('61)年下期に及ぶ岩戸景気の間である。戦後集中排除法で細分化した大企業は、朝鮮戦争と、昭和29(1954)年の景気の山と、昭和30(1955)年上期から32('57)年上期に及ぶ神武景気とを経て合併を繰り返しつつ次第に活力を取り戻し、岩戸景気の頃から相次いで大型の中央研究所を設立して外国雑誌の大量購入を始めた。一方で昭和20年代の後半から各都道府県の旧制高等学校、専門学校、師範などが合併し、いわゆる駅弁大学といわれた新製の国立大学となり、更に昭和30年代の半ばから、私立大学の新增設が活発化し、これらが洋書殊に外国雑誌の新しい需要を作りだしていた。

108.2 外国雑誌の特異性に対し、発注者と業者の双方に認識と理解の不足

外国雑誌の需要増に伴い、大口需要先からの見積りに関する説明会とか、年度末の清算時に、しばしば発注者からの要求と業者側の要望とかぶつかり合って火花を散らす状況が続いた。

この摩擦の基本には、外国雑誌は本質的に購読者と出版社との契約であるにもかかわらず、洋書輸入業者に発注し、すべての納入義務を業者に負わせようとする発注側と、受注するためには本質から外れても止むを得ない、ただどの程度外れるかの条件闘争にならざるを得ない業者側の立場の相違がある。

これらは、普通の商品の受注・納入とは異なる外国雑誌の特異性と、その特異性に対する発注側と業者側双方の理解不足があった。それは発注者側にも、肝腎の業者側にも外国雑誌の性格に関する明確な概念規定がなく、洋書籍及び日本の雑誌に準じたこれまでの商習慣に、ズルズルと引き摺られ、その枠内で双方共に漠然と、或いは漫然と議論し合っていたためであろう。

108.3 業界の試論としてのパンフレット作製

昭和39(1964)年8月14日の理事会で、丸善の雑誌部長の小林氏が、主として関西支部からの申し入れにより、混乱している外国雑誌業務の性格を鮮明にするために、説明を試みた原稿が出来たので理事各社で検討して欲しいとの提案があった。更に8月21日に、日本出版クラブで懇談会を開き、この原稿を来会各社に配布の上討議を行った。

この時の各社の意見を取りまとめ、先の原稿に加筆訂正し、更に理事会にかけて出来上がったのが次のようなパンフレットである。これは9月22日にピーコックで開催された懇談会で丸善小林氏より説明がなされ、更に全会員に配布された。

108.4 「外国雑誌予約取扱い業務の特異性について」の小冊子の要点

昭和39(1964)年9月付で配布された頭記パンフレットの要点のみを転記すると次の通り。

記

外国雑誌の特性とその問題点

日本における外国雑誌の取扱いは、洋書の副業として出発した歴史があるため、外国雑誌業務を洋書と同じく、商品売って代価を受けるという一般売買関係として考えている傾向があります。

ところが外国雑誌は商品を販売するのではなく、ご承知の通り外国では、一部の一般雑誌を除いて雑誌はすべて、予約販売を原則としております。これはマスセルによる流通機構の問題と、読者を明確に把握しておく必要性とから行われているのですが、出版社が各予約者に雑誌を毎号直接送りつける直販形式をとっているわけがあります。従って出版社は本来予約者から直接雑誌代金が送金されてくることを望んでおり、外国為替の問題から送金上の便宜のため、Agentの介在を認めているにすぎません。それ故日本の業者はこの直契約の代行をしている訳で、強いて云えば、出版社が直接予約者に一定期間雑誌を送るという契約の取次をしていることになります。

この関係を図示してみると次のようになります。



法律적으로見ても、洋書は業者の所有にあるものを、代価を受け取って客へ転移するのですが、外国雑誌の場合は、業者に所有権はなく、雑誌の所有権は図に見られるごとく、出版社から予約者へ直接移転します。

所有権がない以上、業者には請求権もなく、すべての権利及び義務は出版社と予約者との間に直接成立し、Agent は言わば保険の代理業のようなもので、ただその契約を取次いだに過ぎないわけでありです。

いうまでもなく、すべて契約は支払と共に発効します。雑誌は前金という鉄則も、外国雑誌は商品の販売ではなくして、契約の取次ぎであるという特殊性の必然的帰結であって、前金支払をしない場合は契約は発効せず、予約者には何の請求権も生じないことになります。

ところで外国の出版社は契約の内容として、種々な Policy を発表しています。

- (1) 前金であること。
- (2) price subject to change without notice 即ち予告なしに代価をいつでも変更できること、また不足金を支払わぬ時は、契約を解除できるか、その分だけ予約期間を短縮できること。
- (3) 郵送途上における不着、欠号事故の責任を負わないこと。
- (4) 欠号を補充する場合でも、その要求は出版された月から1～3ヵ月以内に限ること、または Back Number として有料であるべきこと。
- (5) 初号到着までには約3ヵ月を要すること。
- (6) IBM による機械操作のため、住所は制限字数内で表記すること。
- (7) Renewal bill は必ず order と共に返送すべきこと。
- (8) Order は2～3ヵ月前に出版社に到着すべきこと。遅れた場合は Renewal といえども継続送本を保証しないこと。
- (9) Business Classification は予約者自筆で記入サインすべきこと。また直接返送すべきこと。

- (10) 直送を原則とし、業者宛の予約を認めないこと。
- (11) 客宛て直接に随時特価勧誘をする権利を保留していること。
- (12) 解約取消しによる返金には応じられないこと。

これらは言わば保険証券の裏面に記されている契約条件と同じで、予約者が知っていようといまいと、契約をした以上、或いは Agent に契約を依頼した以上有効であります。もしこんな条件では予約できないという人がいたとすれば、その人は一冊の外国雑誌も取れないことになってしまいます。

本来 Agent の義務は前述の三角形の右辺一辺、すなわち送金をもって完了し、こうした契約内容に介入する権利はなく、ただ商習慣として予約者の権利義務を代行しているに過ぎないのですが、この辺が仲々了解されないで、今日の雑誌のあらゆる問題は、すべてここから発生しているわけでありです。三角関係といえば粹に聞こえますが、これはまた誠に不粹な三角関係の頂点に立つ悩みであります。(以上)

108.5 「外国雑誌予約取扱い業務の特異性」の小冊子と所見

前項で御察しのように、この小冊子の説明は良く出来ていて、外国雑誌の本質を明確に述べている。またこれに図示された三角形は、その後長く外国雑誌についての議論をするときに引用された。

然し残念なことに、これによって業者側の理解が深まり、発注者側への説明の足並みは揃ったが、これによって契約の基本的形式を、納入を請負う形から、保険の代理業務に準じた取次業務の形へと移行することは遂に実現しなかった。この小冊子以降も、日本の外国雑誌輸入業者は、欧米の雑誌出版社の形作った商習慣と、日本の牢固とした会計制度のはざまに立って、後払いの得意先の予約金を立て替え、欠号を自腹を切って納めるような対応に苦しみ状況が続いている。

この小冊子が出た機会に、業界で議論を重ね、納入を請負う形から、保険の代理業務に準じた取次業務の形へと契約の形式を変更できていれば、この小冊子を作ってから20年後に起きた海外からの取次業者の上陸も、冷静に迎えられたのではないかと、仮定の話ではあるがいささか惜しまれる感がしないでもない。(続く)

港区の坂と文明開化〔6〕 公使館めぐり

丸善・本の図書館 鈴木 陽 二

◆ディキンズの日本学と南方熊楠

前回ディキンズ (Frederick Victor Dickins) の英訳『忠臣蔵』について触れたが、ジャパノロジストとしての彼の業績についてもう少し探って見たい。

彼はロンドン大学で医学を専攻しイギリス海軍の軍医将校として1861(文久1)年に中国に赴任し、同年品川東禅寺にあったイギリス公使館付医師として来日した。退官後は横浜で医院と弁護士を開業したが、前回述べたペルーの奴隷船マリア・ルース号事件の弁護士として弁論を振ったのはこの横浜時代のことであった。帰国後はロンドン大学に奉職し、1896年から1901年まで事務総長の重席にあって、1901年にはバス勲位三等爵士として男爵を受爵した。

彼は何時ごろイギリスに帰国したのか判明しないが、忠臣蔵の翻訳“Chiushingura or The Loyal League”が横浜の“Japan Gazette”から刊行されたのが1875(明治8)年であり、ロンドンで在英中の南方熊楠と親交が始まったのが1894年なので、この間の帰国であったろうから、大雑把に見ても20年に及ぶ長期の日本滞在であった。彼の日本に関する知識は浄瑠璃から始めて国文学や動植物に至まで広範囲にわたり、日本に関する優れた著作を著している。また1892年に日本研究を目的としてロンドンに設立された“Japan Society”(日本協会)では日本学の権威の一人として理事を務めている。ちなみに、「日本協会」の創立時には特命全権公使の河瀬真幸が会長となり、議長はウィリアム・アンダーソン、副議長にはピゴットが就任した。アンダーソンは医師として日本における脚気の医学的な業績を挙げるとともに、日本美術の研究でも優れた成果を示した。ピゴットは明治期・大正期・昭和戦前期にとびとびではあったが駐日イギリス大使館付武官として第2次世界大戦勃発直前まで日本に駐在した。

さてディキンズの著作に戻り、その主要なものを挙げて見ると、“Hyaku nin is' shiu” (London, 1866), “Chiushingura; or, The Loyal League” (Yokohama, 1875), “The Old Bamboo-Hewer's Story: the Earliest of the Japanese Romances” (London,

1888)で、このほか Staley Lane-Pool の編纂した『パークス伝』はパークスの中国駐在時代から駐日日本公使時代を通して彼の外交官としての完全な伝記であるが、その駐日公使の部分の彼が担当して執筆している。記録も書簡も少ない中での苦心の執筆にもかかわらず、その実証的な内容はパークス伝研究や日英関係史、幕末・明治初期の日本を研究する上での基本資料という(富田仁編『外国人の見た日本』)。また1906年にはオックスフォードのクラレンドン・プレスから“Primitive and Mediaeval Japanese Texts”を刊行している。

ところで、南方熊楠は明治・大正・昭和に活躍した生物学者・人類学者・民族学者としてあまりにも著名な人物であるが、彼は1886(明治19)年に渡米し1892(明治25)年イギリスに渡る。イギリスでは大英博物館に通って菌類や人類学の研究をおこなったが、その間科学雑誌“The Nature”に『東洋の星座』を投稿し日本人として初めて掲載された(48巻1249号)のを皮切りに数論文が収載され、また、有名な週刊誌“Notes and Queries”にも投稿をおこなって323回の大量の論文を発表している。しかし、ここでは熊楠のディキンズとの関係にしばって記すに止めたい。

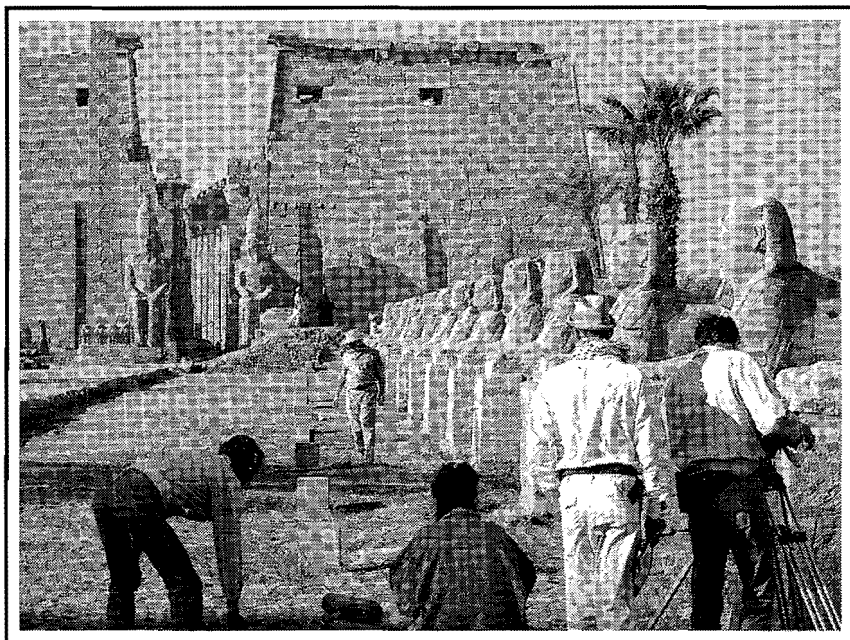
ディキンズがロンドン大学事務総長であった時、熊楠のハーバード・スペンサーに関する論文を読んで関心をもち、総長室に招いて会談したことがあった。この時、たまたまディキンズが自分の訳した『竹取物語』を見せたところ、熊楠にそれを酷評されて怒り反論の手紙を書き送った。それを受けた熊楠が再び面会に赴いて議論したということが重なって、とうとう親密な間柄に発展したという。これが奇縁となって熊楠はディキンズの日本研究の協力者となり、ディキンズの執筆した東洋関係の論文の校閲をおこない、さらに、『方丈記』を共訳して『日本亜細亜協会紀要』に掲載することになった。前述した“Primitive and Mediaeval Japanese Texts”(『日本古文編』)も熊楠の協力によって生まれた著作であるという(笠井清『南方熊楠』吉川弘文館)。

ディキンズにも、世界に雄飛したヴィクトリア朝時代の典型的な英国人の姿を見る思いがする。

人類史上最大の影響力を社会に与え続ける
「聖書」を歴史的な視点から探究する

テスタメント

新・旧約聖書



テスタメント/新・旧約聖書
TESTAMENT・THE BIBLE AND HISTORY

CHANNEL 4 INTERNATIONAL

英国チャンネル4(テレビジョン)

●各巻¥45,000 セット価格¥280,000 ●オリジナル英語音声版ビデオ 全7巻(各60分)スクリプト付

発売元 株式会社 グローバルメディア・システムズ

TEL. 03-3433-4375
FAX. 03-3437-1778

1995年2月 通巻第333号 洋書輸入協会

編集者 神田 俊二

〒103 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室

☎(03) 3271-6901 FAX. (03) 3271-6920

印刷所 一穂本総合印刷株式会社